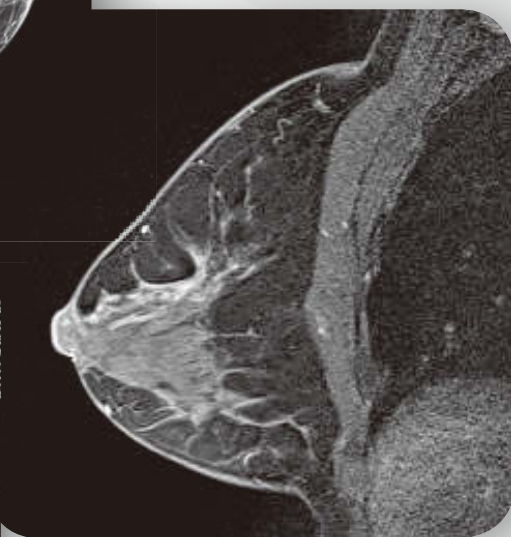
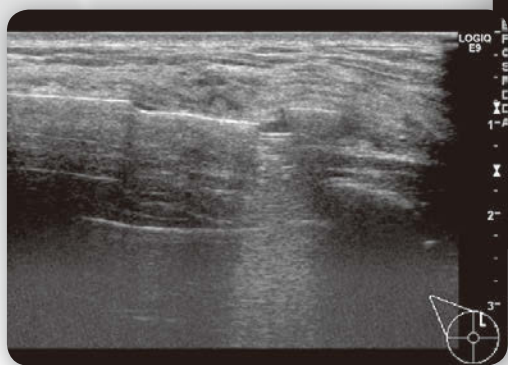


特集

知っておきたい



(写真：p. 784, 806, 810より)

乳癌スクリーニング

序説

がん検診は、スクリーニング検査である。スクリーニングというのは、無症状、もしくは潜伏期となる集団から、多少でも癌の可能性が疑われる人を見きわめてふるい分けることである。これだけを考えると、一見、診療で行っている早期癌の診断と変わりがないようにみえるが、さまざまな潜在性をもった無症状の集団を対象とし、利益・不利益、費用対効果を考え、有効性の科学的根拠が証明されていないとならない……と考えただけでも、その複雑性とバランスの重要性は計り知れない。そのためか、常に、この分野は、世界中で議論が絶えないが、一方で、データが蓄積されれば蓄積されるほど進化を示す分野と考える。

わが国では、2000年度から50歳以上に、2004年度からは40歳以上に、マンモグラフィによる乳がん検診が公的に行われるようになった。そして、この約20年間、日本乳がん検診精度管理中央機構(精中機構)を中心とするたゆみない精度管理が、わが国の乳癌のスクリーニングを支え築いてきたと考える。そして、今、これを基盤として、高濃度乳房問題や遺伝子乳癌などのリスク層別化、新規モダリティの併用導入、任意型検診のあり方など新たな議論が行われようとしている。筆者自身、現実的には、乳癌の診療に携わりながらも、スクリーニングのもつその難解性から、理解不足のまま将来を見据えることもなく過ごしてきてしまったことを反省している。そのため、一度、乳癌のスクリーニングについて直視し修学したいと思い、今回の特集を提案させていただいた次第である。

私的な事情を暴露してしまった後ではあるが、執筆をしていただいた先生方は、どの方もその分野で権威のある先生ばかりで、贅沢きわまりない内容となっている。ご多忙のなか、若輩者の筆者からの依頼を快くお引き受けいただき、ご寄稿いただいたことに感謝きわまりない。この場をかりて、厚くお礼申し上げます。

ぜひ、読者の方々には、この特集で、乳癌のスクリーニングについて見直し、そして、展望として、今、何が考えられているか、理解を深めていただけたらと期待する。

佐竹弘子